

子どもものごころから、
ログハウスが、
ほしかった。

28歳の豪邸・吉川さん

父の夢だったログハウス住まいは、
いつしか自分の夢になっていた。
28歳で実現した“自分たちのログハウス”。
安曇野の別荘地に広がる閑静な森の中、
南面の緩やかな傾斜を生かした
おおらかで堂々たるたたずまいは、
淡々と堅実に日々を営む吉川夫妻の
“大人の落ち着き”を
宿しているように見える。

安曇野の森のなかに、
父が描いていた夢を実現。

ずっと抱き続けてきたログハウスへの思い

森に包まれた静かな別荘地の一画、南から北へ緩やかな上り勾配をなす広大な敷地に、吉川夫妻のログハウスは建っている。6間半(約12m)の間口に、左右に半間ずつ(約90cm)アウトリガーが張り出し、見た目7間半(13・7m)の間口で、堂々としたたたずまいだ。750㎡(約220坪)の敷地に、延べ床面積155㎡(約49坪)、標準的なログハウスより一回りゆつたりとした規模だ。敷地の勾配を生かした少し見上げるような配置のため、外観は一段と大きく、落ち着いた見える。住まいの主は、吉川耕一さん、美穂さん夫妻、ともに29歳だ。

「私は神戸出身なんですけど、父の登山好きが高じて、中学生時代に家族で神戸から信州へ移住しました。なので、そろそろ信州に住んでいる時間のほうが長いんですけど」と、関西のアクセントで屈託なく話すのは耕一さん。輸送関係の企業の社員として、松本市に勤務している。妻の美穂さんは、地元安曇野の出身。住まいから車で10分ほどの医療機関にお勤めだ。

耕一さんの両親は、信州での移住先として、四季の北アルプスを眺望できる、

大町市の自然豊かな山あいの地を選んだ。ログハウスに住みたいという夢を持ち、耕一さんが小さい頃からログ関連の雑誌や本がいつも家の中にあつたというが、移住時点では、周囲の環境もあり、ログハウスを建てるには至らなかった。雑誌とはいえ、さまざまなログハウスを見慣れた耕一さんの頭の中では、将来自分が持つ家のイメージも、いつかしらログハウスになつていたようだ。「家を建てる」と決めた時、一般の住宅は思い描きもしなかったという。



照明は山小屋風に



角材によるログハウス



玄関にはマウンテンバイク

玄関

「縁」が実現へと 導いた20代の持ち家

2005年に結婚した吉川さん夫妻は、アパートでの生活を続けていた。互いに時間的制約の大きな仕事に就いているため、2人でゆつくり過ごす時間は限られている。事前に勤務日程を見せ合い、休日が重なるように調整して生み出す貴重な時間を、充実した思いで過ごす空間が必要だった。また、自宅から解放され、ゆつくりとリフレッシュできる時間にはなかった。そのため、いつか自分たちの家を持つことを夢に、それぞれ貯蓄を進めていたという。

頭金に充てる数百万円の貯蓄が実現したところで、「ログハウスを建てようと思う」と告げた耕一さんの決意を一番喜んだのは、耕一さんの父親だったようだ。仕事の忙しい2人に代わり、ログハウスを建てるのにふさわしい土地を探して、積極的に動き回ってくれた。

父親が選んだ何か所かの敷地候補の中でもっとも気に入ったのが、深い森が広がり、別荘地としては比較的歴史のあるこの場所だった。静かで落ち着いた環境はもちろん、勤務地へのアクセスが容易な立地も、気に入った理由だ。とくに美穂さんが通勤しやすく、買い物などにも便利であることは重要だった。自然が豊かでありながら、厳寒期や降雪期に交通障害等で閉ざされる心配の少ないこのエリアで、気に入った敷地に出会えたことは、家づくりが一気



資金全額を2人で負担 堅実な資金計画

「実は彼女のほうがしつかり者で、かなり貯めてくれていたので、このタイミングで家を持つことができたんです」と、耕一さん。

コツコツ続けてきたお互いの積立預金を合わせて頭金とし、2人は30年の住宅ローンを申し込んだ。双方の両親とも健在だが、あえて資金援助を求めず、2人で払っていくことにこだわった。それは吉川さんたちにとっては決して特別なことではなく、自分たちの家を自分たちの力で手に入れるのは、むしろ自然な感覚だったようだ。

2人それぞれに仕事にやりがいを持ち、しつかり働き、堅実に暮らしてきた。その20代の集大成が、金融機関も大鼓判を押す信用であり、その結果としての家づくりだったといえるだろう。

吉川邸は、規模としては大きいですが、デザインも機能もいたってシンプルなログハウスだ。その質実な風合いは、2人の堅実な生活感覚を映すかのようだ。

に具体化するきっかけとなった。

設計・施工を発注した高松建築工房は、1998年から安曇野を拠点にログハウスや木造住宅の設計・監理を手がけており、奇をてらわない調和のとれた建物を得意としている。社長の高松さんは、安曇野で独立する以前、大阪のログハウス販売・施工会社に勤務していた経歴を持つ。建築関係の職人である耕一さんの父親と高松さんとはその当

時から面識があり、何度か組んで仕事をした経験から、互いに信頼し合う間柄だった。

こうした縁が、吉川夫妻の家づくりを予想以上にスムーズに進める力となった。父親が見立てた敷地、高松さんの設計・監理、そして職人としての父親のめがねにかなった棟梁によって、ログハウスは2007年8月に完成。吉川夫妻は28歳でオーナーとなった。



藤小園

「今」より「少し先」を見据えた家づくり



リビングを吹き抜けから見下ろす



南側に大きくせり出す幅8・1m、奥行き5mの大きなウッドデッキが、吉川邸の特徴だ。耕一さんの父親のアドバイスで実現した高松建築工房が今までに手がけた住宅の中でも最大の大きさだ。そうだが、南側の庭が広く開放的なだけに、違和感なく住まいの一部として存在

感を放っている。

「まだ若い今現在の感覚より、もう少し先を見据えて間取りを考える父のアドバイスを参考にしました。広いデッキも、その一つなんです。広いほうが絶対に気持ちいいぞという父の意見は、本当でした。『必要』だけで広さを決めたら、この気持ちよさは味わえなかった」と、耕一さん。

普段は夫婦2人と2頭のチワワ「アン」「ユズ」の静かな暮らしだが、両家の家族や友人が集う時には、このデッキがコミニケーションの舞台になる。四季を映す木々に包まれてパーベキューを楽しむんだり、心地よい森の風を受けながら会話を楽しんだり。2人で過ごす休日にも、2頭の犬を遊ばせながら、のんびりデッキで過ごすひとときは、かけがえのないリフレッシュタイムとなる。数年後には、幼い子どもたちとの遊びに興じる耕一さん、美穂さんの姿がありそうだ。

手づくり家具に囲まれたリビング



美穂さんの身長に合わせたキッチン



パソコンスペースは階段下



手洗い



洗面台も手づくり



アイアンもお気に入り



2階ホール(下)と寝室(上)

書斎スペース



キッチンには2人で立つことも

外装の塗装や床のワックスがけなど、定期的に自分で手をかけて維持していくのも、ログハウス特有の楽しみだ。薪ストーブを設置したため、薪割りという労働もある。「アパート住まいでは必要なかった「仕事」なので、確かに大変だと

も味わった。

「引越して来たばかりの頃は、夜になると静か過ぎて、暗過ぎて、怖いと感じるほどでしたけど、今はこの静けさが好き。新緑の頃の美しさは、言葉にできないほどでした」と、美穂さんも微笑む。

木工職人・小田時男さん手づくりのオリジナルキッチンや、テーブル、イスなどの調度類が、シンプルな吉川邸の控えめなアクセントとなっている。美穂さんの背丈に合わせたシンクの高さ、室内の空間に合わせてしつらえた家具は、家そのものの使い勝手を高める役割も負っている。照明器具、カーテンレール、水道の蛇口などは2人でインターネットを選んで購入。家づくりに参加する楽しさも味わった。

「リビングのソファにのんびり腰掛け、吹き抜けの窓の向こうに輝く森をぼんやり見ている時間が好きですね。本当にリラクセスできます。これは住み始めてから気づいた感覚でした。」

ダイニング、リビング、寝室、子供室と、生活する部屋すべてを南向きに配置したのも、父親の助言を参考にした結果だという。どの居室にも窓から明るい陽光が差し込み、いながら四季の彩りを望むことができる。別荘地というロケーションを満喫できる間取りだ。



吉川邸



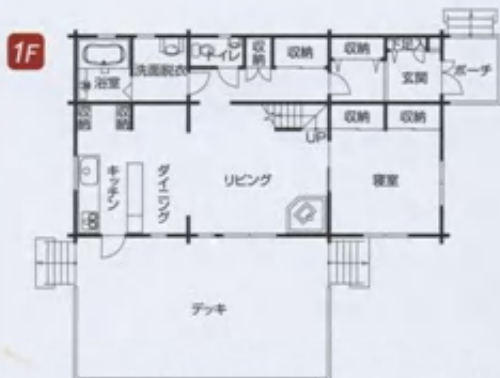
思うけど、ポツポツやればいいかと思ってます」と、話す耕一さんの表情は、淡々とした語り口とは違って実に楽しそうだ。庭の新小屋には、まだ伐り口も新しい薪が積み上げられ、ストーブにくべられるシーズンを待っている。

「自分たちの家」を手に入れてから2度目の冬を迎えようとしている今、吉川さんたちにとって、この場所、この家での暮らしそのものが、かけがえのないものになっていることがうかがえた。

生活を楽しみ人生を充実させるための家

HOUSE DATA

安曇野市 吉川邸
家族構成 夫婦2人
竣工 2007年8月
工法 丸太組工法(角口)
敷地面積 754.12㎡(2281坪)
建築面積 101.60㎡(30.7坪)
延床面積 154.86㎡(46.8坪)
1F床面積 80.74㎡(24.4坪)
2F床面積 74.12㎡(22.4坪)
設計・監理 高松建築工房
0263-82-1260



2F

